青春スクロール 私の母校

麻布高校③（東京都港区）

「アニメが好き」をとことん

ニッポン放送の吉田尚記アナウンサー。２月に出版した『なぜ、この人と話をすると楽になるのか』（太田出版）はすでに９刷と好評を得ている

ニッポン放送のラジオ番組「ミュ～コミ＋プラス」（月～木曜、深夜0時）は、最新のアニメやマンガ、音楽などサブカルチャーの話題を中心に取り上げる。ツイッターでリスナーを巻き込んでいく番組の先駆けだ。

パーソナリティーは吉田尚記アナウンサー（39、1994年卒）。サブカルに精通し、「世界で一番幸せなアニメファン」という。

中高時代、アニメにはまった。アニメ雑誌を熟読し、マンガを読むために自転車で東京・神保町の本屋街に通った。アイドルグループの東京パフォーマンスドールの追っかけもした。

麻布は何をしてもいい雰囲気があった。群れるのは苦手だが、居心地がよかった。だから若者の窮屈さを歌った尾崎豊の気持ちはわからない。

慶応大に進み、落語にはまる。アナウンサー学校の存在も知らないまま、就職課の掲示板にあったニッポン放送の求人を見て、アナウンサーになった。

サブカル知識を売りにしていたわけではないが、今ではサブカル関連のイベントで引っ張りだこだ。「アニメが仕事で役立つとは」と驚く。

そんな吉田さんとアニメのビデオを貸し借りし、一緒に神保町に通ったのが弁護士の桶田大介さん（39、94年卒）だ。

日本アニメーター・演出協会監事として若手アニメーターの待遇改善などに尽力するほか、アニメ関連の議員連盟の政策アドバイザーも務める。自然とアニメ関連の仕事が増えてきた。

中高時代、書道の近藤祐康先生に漢文をマンツーマンで習った。早朝の希望者向け授業で、生徒は桶田さんだけ。原文を淡々と読み下していった。3、4年続いた。

中3の夏休み、友だちと行くと親をだまし、1人で中国に渡った。三国志の舞台が見たかった。旅行ガイド「地球の歩き方」だけが頼りで、夜行列車に揺られて北京から長安をめざし、仲良くなった少数民族と一緒に行商に歩いた。5週間、ひとり旅を満喫した。

漢文のおかげで、何とか筆記で意思を伝えられた。最後に親にばれ、強制的に帰国させられるというオチがついたが、ひとり旅の経験は職業選択にも影響した。1人で世の中と向き合える仕事がしたい、と一橋大を出て弁護士になった。

数年前、2人は18年ぶりにアニメが縁で再会。今度はアニメを通した仕事での交流も始まった。

（佐藤善一）

アニメ業界を弁護士の立場で支える桶田大介さん